

# 否定辞繰り上げ現象と文法化

守 屋 哲 治

## Neg Raising and Grammaticalization

Tetsuharu MORIYA

### はじめに

守屋(1998)では、守屋(1990)をふまえて、否定辞繰り上げの機能は、否定を主観的表現の中に含めることによって否定の強さをばかすことである、と規定した。その上でそれを許す述語の言語間、個人間のばらつきを、典型性条件で規定されるプロトタイプと、そこからの逸脱という考え方で説明しNR述語の時制及び主語の人称についても典型性条件が立てられることを示した。そうすることによって、例えば英語ではthinkが否定辞繰り上げを許す述語(以下NR述語と略記)であるのに対し、日本語では「考える」がNR述語にならず、「思う」がNR述語になるという食い違いや、一人称主語と単純現在時制の述語の場合のほうがNR現象の読みを可能にしやすいという事実を自然に説明できることを示した。

本論文では、否定辞繰り上げ現象(以下NR現象と略記)を許す表現が、主語プラス動詞の地位から、モダリティを示す副詞表現へと移行しつつあるという特徴を持つものであり、この変化は文法化(grammaticalization)の過程として捉えられることを主張する。そして守屋(1998)で提示した典型性条件も、文法化の持つ性質から導かれることを示す。

本論文の構成は以下の通りである。まずI章において、NR現象の説明及び守屋(1998)の概要を述べる。II章では文法化の主たる特徴について言及する。III章ではBybee and Sheibman(1997)に言及しながらNR現象を示す主語+

述語の構造全体が、文法化の過程にある表現として位置付けることが可能であることを示す。そしてIV章において、守屋(1998)で提示した典型条件も文法化の過程に位置付けることによって自然に導かれることを示す。

### I NR現象とNR述語の規定

#### 1. NR現象とは

NR現象とは、複文構造において、構造上は主節の動詞にかかる否定辞が、意味的には従属節を否定しているかのようにふるまう現象である。例えば、下の(1c)の文に見られるような現象である。

- (1) a. \*John arrived until 5 o'clock.
- b. John didn't arrive until 5 o'clock.
- c. I don't think John arrived until 5 o'clock.

(1a)が容認不可能であることに示されている通り、arriveのような特定の時点に動作が達成されることを示す動詞は、肯定文では継続期間の終点を示すuntilに導かれる前置詞句とは共起できない。しかし、(1b)のようにarriveが否定されると、「到着していない」という事態が継続的事象に解釈されるため、until句と共起可能になる。このことから、(1c)のように否定辞が統語上は従属節には存在しないにもかかわらず容認可能になっているのは、なんらかの形で主節の否定辞が従属節に影響を及ぼしているからと考えられるのである。

## 2. NR述語の規定

守屋 (1998) では、まずNR現象を、否定辞の従属節から主節への移動とする、変形操作によるアプローチの問題点を指摘した上で、基本的には意味解釈のシステムに由来する現象であるとした。その上で意味解釈によるアプローチでは、NR現象を可能にする述語をどのように規定するのが問題になることを指摘した。

例えばPartee (1973) では、特定の含意関係の有無によってNR述語を規定しようとしている。(2a) が (2b) の意味を持つのは、(2b) が (2a) を一方向的に含意していることと同義である。すなわち (2b) が真であれば (2a) も真であるが、その逆は成り立たないというわけである。そこでこのような含意関係が成立することによってNR現象が生ずるとしているのである。

- (2) a. A doesn't believe that S  
b. A believes that not-S

しかし、このような含意関係自体は、主節の動詞がNR述語であるかないかに関わらず成立する性質のものであり、なぜNR述語だけがこのような性質を持つのかという問いに答えられない。

そこで守屋 (1998) では、NR述語の規定に関する先行研究を概観した上で、NR述語という範疇はNR現象の機能に由来する典型性条件によって規定され、中心的なものと周辺的なものとが存在するプロトタイプの構造をなしているという主張を行った。

NR現象は、否定の力を主観化したり、確信度を弱めたりするために存在する。このことから、NR述語は意味的に主観や確信度の存在のみを示す述語のほうが、思考の様態までも意味的に含む述語や、副詞などによって意味が強められる場合よりも、よりNR述語になりやすい。例えば日本語で (3a) のように「思う」がNR述語になり、「考える」がNR述語になりにくいのは、「思う」が森田 (1989: 265) の言葉を借りれば、「刹那的判断ないし感性の没入」のみを示すの

に対し、「考える」は「知性を運用させる行為」という違いが原因であると考えられる。

- (3) a. この漫画はちっともおかしいと思わない。  
b. ??この漫画はちっともおかしいと考えない。

このように、NR現象が否定の主観化の機能を持つとすれば、話者の主観を表現する形式として、NR述語の主語には一人称が、そして、動詞の時制は発話時の状態を表わす単純現在形が最も典型的であるということも導き出せる。この条件によって、例えば一人称主語・単純現在形の動詞の主節を持つ (4a) がNR現象としての読みを持つのに対し、三人称主語・単純過去形の動詞を主節に持つ (4b) がNR現象の読みを持たないとする Jackendoff (1974: 294) の判断や、一人称・単純現在形で発せられた文の間接話法と解釈できる (5a) が容認可能なのに対し、思考内容を表す (5b) が容認不可能とする Prince (1976: 421-3) の判断も説明することができる。

- (4) a. I don't suppose they'll win.  
b. Bill didn't suppose/imagine/guess that they had won.  
(5) a. Bill and I talked for hours about his sisters. He thought that Carol would show up that night, but he didn't imagine/guess/suppose that Mary would arrive until next week.  
b. \*Although he had never consciously thought about it, I knew that, deep down, Bill didn't imagine/guess/suppose that Mary would arrive until next week.

これらの典型性条件をまとめると、(6) のようになる。

- (6) a. 述語に関する典型性条件：主観性確信度の存在のみを示す述語  
b. 主語の人称・動詞の時制に関する典

型性条件：一人称・単純現在

NR現象がこれらの典型性条件によって支配されている帰結として、英語ではthinkがNR述語であるのに対し、日本語では「考える」ではなく「思う」がNR述語の性質を持っているというような言語間のばらつきや、個人による判断のゆれなどが説明できる。

生成文法の理論では、理論内で用いるカテゴリーには、段階性を認めないため、NR現象のように、同一言語内での人称・時制によるばらつきばかりでなく、語彙、あるいは異言語間によるばらつきがかなり存在する言語現象を分析する場合には、アドホックな道具立てを増やさざるを得なくなる。<sup>1</sup>

それに対して境界が明確でないカテゴリーの存在を認める認知言語学的なアプローチでは、例えば上で示したように、プロトタイプとそこから逸脱という仕組みで現象のばらつきに自然な説明を与えることが可能になる。

しかし、なぜそのようなプロトタイプの認知構造が当該の言語現象に対して存在するのか、ということが自然に導き出されなければ、認知言語学的アプローチを唱えていても結局は扱う現象にたまたま都合のいい道具立てをあてはめているということにしかならない。NR現象について言えば、NR現象を許す述語・構文がプロトタイプ構造をなしているのは、何によって動機付けられているのか、ということを明らかにする必要があるということである。

そこでまず、次節において先行研究に言及しながらプロトタイプ効果と動機付けの関係について見ることにする。

### 3. プロトタイプ効果と動機付け

プロトタイプ効果が言語分析に適用されるきっかけとなったのはBerlin and Kay (1969) による色彩のカテゴリー化に関する研究である。この研究によって、母国語が異なっても、色彩のカテゴリー化は同じ焦点色を中心として行われていることが明らかになった。また

Heider (1971, 1972) などによって、このようなカテゴリー化を動機付けるのは人間が共有している色彩に関する認知能力である、ということが示された。その後、Rosch (1973, 1975) によって図形、動物、植物、家具などの人工物のカテゴリー化に際してもプロトタイプ効果が見られることが明らかになり、Labov (1973) によって、プロトタイプを中心として構成されるカテゴリー構造では、カテゴリー間の境界が明確でないことも実証された。これらの研究では、人間が外界を知覚し、情報をカテゴリーに分類する際に、最も知覚しやすいプロトタイプをまず認識し、それとの関連でカテゴリーを決めていくという人間の認知様式が動機付けとなってプロトタイプ効果が生じているとされていた。

言語研究自体でカテゴリーの段階制を取り入れたものとしてはRoss (1973) の名詞性に関する研究が先駆けと思われる。またJackendoff (1983) のPreference Rule Systemもカテゴリーの段階性を記述できる道具立てを提出している。しかし、これらの研究では、動機付けとの関係は必ずしも明確にはなっていない。一方、Hopper and Thompson (1980) の典型的他動性の研究では、人間の事態認知のあり方から他動詞構文のプロトタイプを動機付け、それを類型論的に論証している。

このようにカテゴリーのプロトタイプ性が問題になる時、その背後にある人間の認知様式が動機付けとされている。それでは、NR現象の場合は一体どのような認知的動機付けが存在していると考えられるだろうか。NR現象の機能は先に述べたように、否定を主観化し、その効果を和らげることにある。そのため、本来は従属節を従え、文全体の中心的な断定を表していた主節が、否定の効果を和らげるために付加された挿入節的役割を担うように変化していると考えられる。このように本来命題内容的な意味を担っていた形式が、文法的意味を担うようになる変化は、文法化と呼ばれている。文法化に関しては多くの研究がすでになされてきている

が、プロトタイプ効果に関係する特徴も見られることがわかっている。従って、NR現象に関して典型性条件が存在し、プロトタイプの効果が観察されるということは、この現象が文法化の一種として位置付けられることに由来すると考えられる。そこで次章では文法化の性質および先行研究事例に関して概観し、III章においてNR現象が文法化の一種として位置付けられることを主張する。

## II. 文法化

### 1. 文法化とは

文法化とは語彙的な要素が文法的な機能を担う要素に、あるいは元々文法的な機能を担っていた要素がより文法的な機能を多く担う要素へと移行する変化を指す。

有名な例として、動詞goの、物理的移動を表す意味から未来を示す助動詞への移行があげられる。

- (7) a. Susan's going to London next month.  
 b. She's going to London to work at our office.  
 c. She's going to work at our office.  
 d. You're going to like her.  
 e. You're gonna like her.  
 f. You gonna like her.

(7a)では、主語Susanの具体的な物理的移動のみが表されている。それが(7b)のように目的を示す不定詞句と共に起した場合に、目的が達成される時点が発話時から見て未来になるという推論がはたらき、's going toの部分が未来の意味と関連づけられるようになる。Shakespeare時代の英語では(7a)、(7b)は可能であったが(7c)以下のような用法は見られなかった。しかし、このような推論が慣習化してくると's going toが一つの構成要素として再分析され、

(7c)のように目的を表す不定詞が直接後続することが可能になる。さらに後続する不定詞の動詞の種類も、顕在的な動作を示すものから、

(7d)のlikeのように状態を示す動詞が可能になり、さらには(7e)、(7f)のように's going toが一つの構成要素として縮約を起こし、一つの語彙へと変化を起こしつつある。

(7f)はまだ非標準用法とされているが、口語英語ではかなり定着してきているようで、文字を習い始めるまでgonnaが一つの語であると信じていた子供がいたことも報告されている。<sup>2</sup>

また日本語の例として、「という」が助詞プラス動詞の連鎖から、一つの単位としての接続詞へと移行していく変化があげられる。

- (8) a. 父はいつも「疲れた」という  
 b. 長嶋監督がやめるといふ噂  
 c. 駐車禁止という張り紙  
 d. 日曜日というといふ必ず用事が入る

(8a)では「いう」に、「音声の言語で表現する」という本来の意味があることがわかるが、

(8b)では、「いう」の「音声の」という意味要素が落ちていて、動作主も不明確になってきており、機能的にも「噂」の内容を表す節をつなぐ同格接続詞的な働きを持つようになっていく。また(8c)、(8d)になると、「言う」が本来持つ意味要素はほとんど欠如して、「いう」が一つの構成要素として接続詞としての機能を担うようになっていく。

これらの例からもわかる通り、文法化とは、特殊な言語変化ではなく、言語を問わず多くの文法的要素を生じさせる一般的な変化であると考えられ、言語類型論や認知言語学の領域で注目を集めている。これらの領域の研究者たちが多くの文法化の事例を研究する中で、その特徴がはっきりしつつある。そこで次節ではHopper and Traugott (1993) や Bybee et al. (1994) の議論を参考にして文法化に見られる特徴を概観することにする。

## 2. 文法化の特徴

### 2.1. 語彙の意味から文法的意味への移行

文法化が起きる際、語彙の要素の持つ意味が文法的意味へと移行する。その移行の仕方には

いくつかのパターンがあり、例えば (7) の's going toの場合には、物理的移動と時間的経過との間の語用論的推論関係が移行を引き起こしていると考えられる。<sup>3</sup> また、後述する英語の完了形の発達のような場合では、メトニミー的なアスペクト上の焦点の移行が関与している。(8)の「という」の例では、「いう」の持つ語彙的意味がいわば漂白化 (bleaching) を起こすことによって一般性を帯びた意味へと移り変わっている。

## 2.2. 文脈の拡大

文法化を受ける要素の意味が文法的なものへと移るにつれ、用いられる文脈も限定的なものからより一般的な文脈へと拡大していく。goがまだ空間的な移動の意味を保持している段階では、後ろに到着後の目的となる動作を表す不定詞以外従えることができなかったが、(7c)のように、意味が一般化していくにつれ、空間的移動とは関係のない事象を表す不定詞を従えることも可能になっている。(8)の「という」の場合も、漂白化によって語彙的意味が一般化するにつれ、接続詞としてより多くの文脈で用いられるようになっていく。

また、Bybee (n.d.) が述べているように、文脈の拡大による使用頻度の上昇が、さらに文法化を促進するという側面もでてくる。

## 2.3. 段階性

語彙的要素から文法的要素への変化は一足飛びに起こるのではなく段階的である。そのため、語彙的要素と文法的要素の両方の解釈が可能な文脈で用いられる、いわば中間段階が存在する。例えば (7c) では実際には主語が空間移動をする文脈でもしない文脈でも用いることが可能であり、完全に文法的要素になっているとは言いきれない。このような段階性は、通時的には漸次的変化という形で表れる。また共時的には中間的構造の存在と文法化が進む程度の違いによる差異という形で表れる。

## 2.4. 再分析：構造上の変化

文法化においては、ひとつの語が文法的要素へと移り変わるというよりも、いくつかの語の連鎖が一つの構造的・意味的単位として再分析されて移行していく。その顕著な例として、英語の完了形の発達を考える。

- (9) a. I have the fish caught.
- b. I have caught the fish.
- c. I have slept a lot.

(9a) で caught は the fish を修飾する過去分詞で、「捕まえた魚を持っている」という意味になっている。このような例では、動作が完結した状態を示す (9a) と動作の完結自体とは時間的に隣接関係にあり、メトニミー的な拡張によって完了相を示す形式が発達するようになったと考えられる。その際に (9b) のように過去分詞が目的語の前に移動して、have と過去分詞がひとつの構成素となるように再分析されている。Jespersen (1982) によれば (9b) の形は古英語ですでに用いられていたが、まだ単純過去形が完了の意味で用いられていたため、それほど生産的ではなかったようである。また、(9b) の形式が用いられるようになってからも、(9a) の構造の影響からか、しばらくは他動詞の過去分詞しか用いることができず、(9c) のように自動詞がこの構造で用いられるようになってきたのは中英語の時代になってからとのことである。

(9b) から (9c) のような移行は、「have+過去分詞」が一つの構成素として再分析され、自律性が徐々に高まることによって、(9a) のような構造との関連という制約から解放されて可能になったものと考えられることができる。

このような再分析は (7) や (8) の例でも見られる。(7) では's going to が再分析によって一つの構成素となった結果、自律性を持ち後続する動詞の種類の制約を受けなくなっていき、さらに音韻的にも縮約がすすんで一つの語彙になりつつある。(8) でも助詞「と」と「いう」の間の語境界が、再分析されることで消失し、ひとつの構成素へと移り変わって行く。

## 2.5. 構文レベルでの移行

これは前節で述べた特徴と関連することであるが、文法化は、単一の語の意味が語彙的なものから文法的なものへと移行するのではなく、特定の語彙項目を含む構文全体が変化していくものである。(7)の例でいえば、動詞goが空間移動の意味を元にして未来の意味を帯びてくるのではなく、be going toというgoを含んだ進行形の構文全体が未来を表す意味へと移行していく。また(9)の完了形の例では、have自体が完了形の意味を帯びるのではなく、「have+過去分詞」の連鎖が完了相を表す意味へと発達していくのである。

この章では文法化の持つ主要な特徴を概観した。次章では、本章で概観した特徴がNR現象にどのようにあてはまるかを見ていくことにする。

### III. NR現象と文法化

#### 1. 語彙の意味から文法的意味へ

否定を主観化するNR現象では、主語+述語全体の意味が、各語の意味を足した合成的なものから、非合成的かつ主観的な意味へと移ってゆく。Bybee and Scheibman (1997) はdon'tの縮約に見られる規則性を、実際の発話データの分析に基づいて細かく調べているが、調査対象となったデータの中で、I don't thinkに節が後続する場合は、not thinkingにあたる語彙的な意味で用いられている例は一つもなく、従属節に対する認識様態的(epistemic)な態度を示す働きをしているという。<sup>4</sup>

語彙の意味が文法化を通じて主観的意味を持つという事例は、Traugott (1989) の英語法助動詞の発達の研究や、Bybee et al. (1994) におけるモダリティの発達の研究などでも報告されている。従ってNR現象に見られる意味変化も、同じように文法化に伴って生じていると考えることができる。

#### 2. 文脈の拡大

Bybee and Scheibman (1997) のデータによ

ると、don't+動詞の124例のうち、動詞にthinkが用いられている例が20例あり、そのうち19例で主語がIであったということである。そして前節でも触れたように19例のI don't thinkはすべて認識様態的なモダリティ表現として解釈されたとのことであった。このように高い頻度でI don't thinkが用いられていることは、モダリティ表現に移行することにより、用いられる文脈が拡大していることを推察させる。<sup>5</sup>

#### 3. 段階性

1節でも述べた通り、Bybee and Scheibman (1997) のデータで20例のdon't thinkのうち、主語がIであるのが19例だった。これは、I don't thinkという連鎖がNR現象を起こす表現としてもっとも固定化が進んでいることを伺わせる。この傾向は話言葉だけに限らず書き言葉の資料にも見られる。COBUILDのコーパスによってdo not thinkの連鎖を検索したところ、抽出された17例のうち、Iが主語になっているのが11例、weが2例、youが1例、そして命令文で用いられているのが3例であり、ここでもI do not thinkがもっとも文法化が進んで固定化していることを伺わせる。<sup>6</sup>そして、同じコーパスでdoes not thinkという連鎖を検索したところ、用例を一つも抽出することができなかった。

これだけのデータで結論付けるのは不十分ではあるが、NR述語のthinkの主語として、一人称から二人称へは拡張が起きているものの、三人称まではまだ行き着いていないことを推察させる。もし、その見方が正しいとすれば、Jackendoff (1974) の(4)の例文における判断やPrince (1976) の(5)に示されるような文法判断も自然に説明がつく可能性がある。また中間段階的な用例も観察される。

- (10) Crichton did a clog dance on my drawing board, and altogether the evening was a tremendous success, the like of which *I do not think* has been experienced in the manse before.

## (COBUILD)

(10)のような文ではI do not thinkが挿入句として働いているという解釈と、関係詞節の中で従属節を従えているという解釈が可能である。これはまさに文法化の段階性の反映と言える。

## 4. 再分析：構造上の変化

I do not thinkが再分析を受け、一つの構成素になっていることにより、モダリティを示す副詞同様に、文の先頭以外の位置にも起こることが可能になっている。これは従来、挿入節(par-entheticals)と呼ばれている現象であるが、文法化の一種と考えることでごく自然に予測される現象と言える。具体的には前節であげた(10)の例で、I do not thinkが挿入節的働きをしていると解釈することが可能である。

## 5. 構文レベルでの変化

3節でみたように、Bybee and Scheibman (1997)の話言葉の研究でも、COBUILDのコーパスによる書き言葉の調査でもI do not thinkの頻度が最も高いことがわかった。また、コーパス調査では、I以外で主語と共起している場合は、一人称複数のweと二人称のyouに限定されて三人称複数の主語の例は見られない。このことから、主語も含めたI do not thinkの連鎖が文法化の単位として移行していることが伺われる。

この章ではI do not thinkという構文を中心に、II章で見た文法化がどのようにあてはまるかを観察した。この構文自体が後ろに節を従えるという環境で認識様態的なモダリティを表す機能を帯びるようになり、またそのような機能を持つ句の頻度が高まることから文脈の拡大も見てとれた。また、主語の人称によって頻度の差が見られ、なおかつ主節的な解釈と挿入節解釈を許すような文脈が存在するなど、段階性的の特徴も有することがわかった。これらのことから、特定の語を含む構文全体が、文法的意味を持つように変化するという文法化の特徴を持つ

ていることがわかった。しかも英語のNR現象ではI do not thinkから出発しているということが推測された。

## IV. 文法化と典型性条件

この章では、前章までの議論に基づき、NR現象を特徴付ける典型性条件は、文法化の持つ性質によって動機付けられているという主張を検討する。

NR現象において、命題内容を構成する要素がモダリティ的な意味を担う要素へと移行する際、話者の発話時点の主観を示すのに最も適した形式を持つものから再分析を受けて文法化していくらしいことが観察された。この最も適した形式(前章の例で言えばI do not think)はモダリティ表現として用いられる頻度が高くなり、定着化していくことで、英語の母国語話者であればばらつきなくNR現象を示す形式として解釈可能になっていったと考えられる。今回検討した実例の範囲では、do not thinkの場合、二人称の主語までは拡張している可能性が見られたが、三人称の主語までにはまだ拡張していないと考えられる。このような広がり方の差が人称の典型性条件の背後にあると考えられる。同様のことが述語に関する典型性についても言える。英語においてthinkのようないわば思考作用の存在のみを表しうる述語からこの構文の文法化が始まっていることが、他の述語との容認度の差を生んでいると考えられる。

この点で注目すべきなのは(11)に挙げるような例である。

- (11) a. I don't know that it's very important, is it?  
b. I'm not sure that's right, is it?  
Cattel (1973: 623)
- (12) (So) John has left, has he?

これらは付加疑問文の極性が母文と同じであるにもかかわらず(12)のような本来極性が同じ付加疑問文を持つ、皮肉のニュアンスがない文である。このような例は変形操作によるアプロー

チが盛んに行われていたところに否定辞移動の根拠として挙げられていたのだが、Cattelが挙げているこれらの例は非NR述語の場合であり、否定辞移動に疑問を投げかけるものであった。しかしこれらの例もI don't thinkと同じようにモダリティ表現としての機能を担っており、否定の作用域が後続する節全体に及んでいると考えれば、NR述語と同じような振る舞い方をするのも説明がつく。実際、注の5でも言及しているが、Bybee and Scheibman (1997) で最も頻度が高かったのがI don't knowであったこともこの主張の裏付けになると考えられる。

本論文では、理論的枠組みの考察が中心であり、具体的な論証には、Bybee and Scheibman (1997) やCOBUILDのコーパス・データなどを利用して、英語のdo not thinkという連鎖に関して行ったのみである。さらに英語の他のNR述語を含んだ構文との比較、あるいは他の言語においてもNR現象とモダリティ表現への移行との関連が英語と同様に観察されるかを実際に調べることにより、本論文での主張の妥当性が確かめられるであろう。

## 注

1. 例えば、NR現象が変形操作によって引き起こされるとする理論では、どの動詞がそのような変形操作を引き起こし得るかということを辞書に記載する必要が出てくる。また、人称や時制に関する情報は、かつての生成文法のように構造記述と構造変化という概念をもたず構文という概念すら認めていない現在の生成文法理論ではそもそも述べることができない。
2. 1998年7月27日に神戸大学で行われたJoan Bybeeの連続講義の中で語られた逸話による。
3. この移行はHeine et al. (1991) では、メタファー的拡張として捉えられている。
4. not thinkingの意味はI don't think aboutのようについてaboutで導かれた前置詞句が後続する場合に限られるようである。
5. Bybee and Scheibman (1997) が抽出した124例のうち、最も多く後続する動詞はknowで39例

あり、そのうち37例の主語がIであった。I don't knowの場合はI don't thinkとは異なり、文字通りの意味で用いられている場合とモダリティの意味で用いられている場合とがあり、後者の場合のほうがdon'tの音韻的縮約が進んでいる度合いが高いことが報告されている。

6. 書き言葉では表記上は縮約形は用いないのでdo not thinkという形で表した。

## 参考文献

- Berlin, Brent and Paul Kay. 1969. *Basic Color Terms: Their universality and evolution*. University of California Press.
- Bybee, Joan. n.d. "Mechanisms of change in grammaticalization: the role of frequency," Joan Bybee's home page at University of New Mexico. <<http://www.unm.edu/~jbybee/newpage3.htm>>
- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. The University of Chicago Press.
- Bybee, Joan and Joanne Scheibman. 1997. "The effect of usage on degrees of constituency: the reduction of *don't* in English," Joan Bybee's home page at University of New Mexico. <<http://www.unm.edu/~jbybee/newpage1.html>>
- Cattel, Ray. 1973. "Negative transportation and tag questions," *Language* 49, 612-39.
- Heider, Eleanor R. 1971. "Focal color areas and the development of color names," *Developmental psychology* 4, 447-55.
- Heider, Eleanor R. 1972. "Universals in color naming and memory," *Journal of experimental psychology* 3, 337-45.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friedrike Hünemeyer. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. The University of Chicago Press.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson. 1980. "Transitivity in Grammar and Discourse."



- Language* 56, 251-99.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge University Press.
- Jackendoff, Ray. 1971. "On Some Questionable arguments about Quantifiers and Negation," *Language* 47, 282-97.
- Jackendoff, Ray. 1983. *Semantics and Cognition*. MIT Press.
- Jespersen, Otto. 1982. *Growth and Structure of the English Language*. 10th edition. The University of Chicago Press.
- Labov, William. 1973. "The boundaries of words and their meaning," In Charles-James Bailey and Roger W. Shuy, eds., *New ways of analyzing variation in English*. Georgetown University Press, 340-73.
- 森田良行. 1989. 『基礎日本語辞典』角川書店
- 守屋哲治. 1990. 「否定辞繰り上げ現象について」, 『英語教育』28巻11号, 76-79, 12号, 73-75.
- 守屋哲治. 1998. 「否定辞繰り上げ現象の認知的要因について」『金沢大学教育学部紀要, 人文科学・社会科学編』47号, 39-51.
- Prince, Ellen. 1976. "The Syntax and Semantics of Neg-Raising," *Language* 52, 404-26.
- Rosch, Eleanor. 1973. "On the internal structure of perceptual and semantic categories," In Timothy E. Moore, ed., *Cognitive development and the acquisition of language*. Academic Press, 111-44.
- Rosch, Eleanor. 1975. "Cognitive representation of semantic categories," *Journal of experimental psychology* 104, 193-233.
- Ross, John R. 1973. "Nouniness," In Osamu Fujimura ed. *Three Dimensions of Linguistic Theory*. TEC Company.
- Traugott, Elizabeth. 1989. "On the rise of epistemic meaning: An example of subjectification in semantic change," *Language* 65, 31-55.

#### コーパス

*Collins Cobuild on CD-ROM. CD-ROM. Harper Collins Publishers Ltd. 1995.*